

カイゴロシをめぐる語り

—新潟県東蒲原郡の事例より—

高塚 明 恵

はじめに

新潟県東蒲原郡は、津川町・鹿瀬町・三川村・上川村の四つの町村からなり、福島県と境を接している。

二〇〇〇年十一月から数回にわたる新潟県東蒲原郡での調査の中で、この地域に存在していたという「カイゴロシ」という習俗について聞くことができた。

この、カイゴロシという習俗は人々にどのような言葉、表現で語られてきたのか、現在どのように語られているのだろうか。

一、新潟県東蒲原郡でのカイゴロシ

二〇〇〇年十一月から、二〇〇二年八月にかけて、計五回にわたり東蒲原郡でカイゴロシについての聞き取り調査を行つた。

その結果を八項目に分け表に整理した（表一）。表中の番号六

以降は話者自身が実際に知っていたカイゴロシの実例である。

まず、賃金に関しては祭や正月に、たまに小遣いもらう程度で基本的には無給であった。調査者の、カイゴロシとは何かといふ質問に対し、話者たちは一様に、「カイゴロシ」というのはですね。（略）多少の煙草銭、煙草吸う人はお金でなくて煙草をこうやって与えてやると、お酒を飲む人は多少晩酌で飲ませてやると、というようなこと（聞き書き資料a）」「ただ働きでカイゴロシでそういう言葉ありますね（聞き書き資料b）」・「結局そこでただで働かして、それだから、カイゴロシって言うじゃないの（聞き書き資料c）」・「そこで一生面倒見るけども、金もくれないって言うかこれ、カイゴロシ。（聞き書き資料d）」・「はらわねえ。ただご飯さえ食わしてもらえば、それでいい。そういうの、カイゴロシだから。（聞き書き資料e）」等と答えていることからも、無給であるということがカイゴロシの大きな要素の一つであるといえる。

カイゴロシとして働く理由としては、実家の経済事情、また、軽度の知的障害者である場合や、身寄りがないから、といったことがあげられている。

カイゴロシとして雇われた男女はどのような仕事を与えられていたのか、カイゴロシとして働いていた女性を知る話者は、その一日の仕事を次のように話している。「朝早くご飯炊いて、

のう、そして学校に行く子どもたちのみんな弁当詰めて、そして、ご飯食べて終わつたあとに、こんだ、一緒に仕事をするでしょ、田んぼとか、そうすると、みんなほうほうほうほうつて走つていつて一緒に仕事をした。(聞き書き資料e)」

仕事は主に、農作業・家事等、その家の日常生活に関わる雑用全般であった。また、子守もカイゴロシの重要な役目であった。

一生死ぬまでカイゴロシとしてその家で働いた後、その死後葬儀は雇つっていた家から出されという。また、まれであるが、女性の場合他家に嫁ぐこともあったという。その際も雇われていた家から嫁に出されるという形をとつており、嫁入り道具等の仕度も雇い主側が負担している。また、雇っていた家の分家として一家をもたせられる事もあつたといふ。このことから、カイゴロシは、その実家ではなく、雇い先の家に属する存在であつたことがうがえる。それは、カイゴロシとして雇われていた男性を「○○(雇い先の家名)のおんつあま(聞き書き資料c)」と呼んでいたとする証言からも、明らかである。

多少の例外は別として端的に言えば、様々な事情から生家とは別の家で無給で、死ぬまで一生働く人物のことを東蒲原郡ではカイゴロシと呼んでいることになる。では、次にカイゴロシとして働いていた人々は、どのような人物として話されているのか、見てゆきたい。

二、新潟県東蒲原郡で語られる、カイゴロシ

津川町民俗座談会のカイゴロシ

『高志路』百三十号に所収された津川町民俗学座談会でカイゴロシについての発言がある。この座談会は昭和二十四年一月三十日に小林存が、東蒲原郡津川町を訪れた際、関山建造という人物の自宅で行われたものである。出席者は、当時の東蒲地方事務所や津川町役場の職員、新潟民衆新聞の記者達であつた(註1)。カイゴロシについては東蒲地方事務所厚生課主事であつた北上一男と、同じく東蒲地方事務所の教学課主事であつた佐藤元の発言がある。

資料1
田邊 昔の家族制度の中に『飼い殺し』というのがありました。これは北上さんの領分でしよう。

北上 『飼い殺し』はまだ今日もあります。つまり主として女の子ですが、五、六歳のものを多少の金を親許にやつて貰つ

て来るのです。そしてそれを自分の家で育て、まあ体のよい奴隸に仕立てるのです。自分の子供とは全然待遇を異にし、山稼ぎなどにひどく駆使した揚句生涯祿な目に合わせず、文字通り

『飼い殺し』にする。兎もすると主人の慾望の犠牲とし妾として正妻と同居させるようなものもあるが、之はその方が却つてよく稼ぐという考え方も手伝っている、『飼い殺し』が非常に

よく働いてその為身代を起こしたというのもある。

佐藤 そういうのが出張先などで給仕に出ることがありますが影が暗くて一目で分かります。或る處で意外に明るいのがありましたから尋ねて見るとそこの家ではこの娘を母親の側へ寝せて一切家内のものと差別待遇しない、そういう例もあります。

(後略)

ここで北上と佐藤によるとカイゴロシは「主に女兒」で過酷な労働に従事させられ、実施との差別待遇に耐えつつ、悲惨な運命を送るという、人物として話されている。

一方で、二〇〇一年の調査では次のようなカイゴロシの話を聞くことができた

資料2 (聞き書き資料a)

結構身近にそういう人が?

うん。おつたね、おつたね。それ、私のまあ同級の人だけぞれはあんまり、やっぱりね、そのうちのあれにもなるから今は

ちょっといえないけど。

ああ、はい。はい。

まあその私と同級の人を子守してね、そして自分のうちで亡くなつて。

「オレはこの人に厄介になつたんだから、うん粗末にはできなんだ」ということを彼がね、〇〇〇温泉で一緒に風呂に連れてくれるわけだ、連れてきて、それは私らわかるわけだから、子どもの時からちょっと頭が悪かつたんで、えーこちらのほうに鉱山があつて、そこに家族と一緒に来たんだけども、生まれて

きた子どもがあんまりにもそういう、知恵の遅れた子でね、「まあ気の毒だということでじやあうちで預かろうと、預かっていくから」ということで、それはだんな様ですよ。その人を預かってそして自分のうちのことと一緒に家族と一緒に、あの、いいうちであつたからね。そういう差別はなかつたね。そしてその、私と同じ年代の人を、子守をさせてね、それでその人を何々のじいちゃんだ、何処々のじいなんだというような呼び名でえーまあ、長谷川なら長谷川、佐藤のじいなんだ、じいちゃんなんだということで、そして子守をして、「オレはこの人だけは粗末にできないんだ」といつて温泉に連れてくることがちよいちょあつたね。〇〇〇温泉にね。

はい

うん。それで自分が、背中を洗つてやつてね、あれを見てほりとしたね。「おー彼はいいとこ持つてるなあ」て、私は学校

同級だからそれはあまりねえ、勉強もしなかったその大将は、□□□（聞き取れず）なんだけどあんまり勉強もしないというようなことでね、人間性はつて言つたら非常にゆとりを持つてせいかつしてきたからね、「いやあお前もなかなか感心だなあ」つてオレが言つたらね

「いや、俺はこの人、俺を育ててくれたんだ。」でそれがなんだかつてえと、「オレのカイゴロシだわい」こういつた。そういうのがあったよ。あるよ。うん。いや、最近までその言葉よく、最近までその言葉あつたね。あれは、「あそこのうちのカイゴロシだなあとか（後略）

ここでは、家人に恩人として、大切にされているカイゴロシの姿が感動的な秘話として語られている。

二〇〇〇年から二〇〇二年までの調査でカイゴロシについて聞き取り調査の対象になつた話者の年齢は六十代から八代前半である。彼らの話の中に出でてきたカイゴロシとして雇われていた人々はさらに三十歳年長であると推測できる。とすれば、昭和二十四年に津川町で話題に出されたカイゴロシの女性たちと同時代に生きていたはずである。にもかかわらず、両者のカイゴロシ像には明らかな温度差があるといえる。これは、話している人物のパーソナリティの違いや、時代の違い等の影響から、カイゴロシの持つ性質のそれぞれ別の面が誇張されて話されたものであるとは言えないだろうか。

前述の一例は、第三者の立場からカイゴロシについて話されたものだが、次に、当事者の方である雇い先の家人から見たカイゴロシ像をあげてみたい。

二〇〇二年八月に行つた調査で、かつてカイゴロシを複数人雇つていたA家で話を聞くことができた。A家は、その地域のいわゆる肝入りの家柄である。現在の当主であるB氏（八四歳男性）に話を伺つたところ、B氏が記憶しているだけでも三人の男女がカイゴロシとしてA家に雇われていたという。

B氏はまずCさんという女性について話してくれた。

資料3（聞き書き資料e）

○うんそうそうそう。あの、今はそんなことありえねえども、あのね、子どもころ、わしのとこ来たおなごっていうと、あの、ああ九つ、九歳からね二十幾つまでいた。

→それはお嫁に行つたんですか？

○こっから嫁に行つた。欲しいという者があつて、

→じゃあその人の場合は死ぬまでじやなかつたんですね。
○死ぬまでじやねえども、要するにあそこの衆は、あそこのおなごはカイゴロシだつて言われたんだども、縁あつて嫁に行きたいつて言うもんだから、ああそれなら嫁に行けつて、こつちが、みんな箪笥やら買って預けてやつて。

（略）

さつきここのお宅からお嫁さんに出してあげたって言う女の人のことをおっしゃってたじやないですか、そういう立場の人があ嫁さんに行つたり、分家を出してもらうつて言うのは珍しいことだつたんですか。

○そうだなあ。珍しかつたなあ、でだども、C、なんてのはこつから嫁に行くよな年だから、ここにこうにて二十三四にもな

ればのう、嫁にもらわねば、「Cいつ嫁行く」なんたつて、

Cなんてのは、「嫁にや誰ももらつてくれね」、「でも欲しいつてもんあつからどうする」、「そしたら行くか」、つてね。でも行くつたつて何にもねえろだからこつちからみんな、着物だ箪笥だつてくつづけて（後略）

Cさんは九歳でA家に奉公にやつてきた。彼女自身に賃金等は支払われなかつたが、正月に実家の両親がA家に米と炭を取りに来ていたという。その後Cさんは二十代前半で縁があり他家に嫁いでいった。B氏は話によればその際の仕度はA家の負担であつたという。カイゴロシとして働いていた女性たちにとって、Cさんのように他家に嫁いでゆくことは珍しいことであつたという。

彼女はB氏よりも十歳以上年長で、A家の子どもたちの子守もしてくれていた。学校には通つておらず、文字を読むのが苦手であつたため村の若者からCさんにきたラブレターをB氏が代わりに呼んで聞かせたという思い出も話してくれた。

また、五年ほど雇つていた、とても手先が器用であった、Dさんという男性についても話を聞くことができた。Dさんは警察署からA家に託されていた人物で、ある事情から、警察から賃金の支払いを禁止されており、カイゴロシとして雇つていたという。

資料4（聞き書き資料e）

○おらが、初めて仕事する頃なんてね、そういう人いて、こうして縄なう、ワラジでも草履でも本当に上手だつた。そういう人たちは藁つこなうなんて、殿様にくれてもいいようだつた。なぜかつて言うとね、その人は酒が好きで、金がねえのに酒の

むろ、そうすつと、無錢飲食でしょ、無錢飲食で刑務所行き、だから前科十四犯てのは。

十四犯。

○十四回今日でて明日刑務所引き返すなんてのもあつた。そういう人がうちにいたつた。なるほどね、履物なんて見事なものだつた。

そういう人を面倒みて。

○うん、面倒見てね、死ぬ間際になつたならね、そだ正月の頃だがな、ぶつといねくなつたんだがな、うんあれやつぱり、実家の方さ行つたのかな。

まあ、もう「くなるからつて?

○うん、死んでしまつたんろ。（略）あの人はね、前科十四犯

で、まずね履物なんてのは見事だった。藁くず一つださねえ。
「じゃあ器用な人だつたんですねえ。

○器用な人だつた。だから刑務所行くと「また来ましただんな様」って、「ばかやろまた来たつて奴あつか。」つてすぐ着物着替えて、「お前こうしろ」つて言うとちゃんとする。

なに、金一円か三円しかねえ者に五円ばかりも酒飲むでしょ。そしたらおめえさん、一円か二円で刑務所行きなんだもの、無錢飲食だから、ほいで常連だからこれこれまた飲んで、裁判なんか構いなしさ、これはもうはあ刑務所行き。だから、十四犯にもなつたんさ。で、うちに引き取つてからはもうしねがつた。

うん うちにね五年くらいいたな。

「じゃあもうずいぶんお年の時にいらつしゃつた。

○うーん年寄りでもねかつたけども。晩酌にコップに一杯飲んで、三度三度ご飯さえ食べてればそれでいい うん。金預けるとすぐに無錢飲食するから、警察署から金は一切お断り、そつから回ってきたもんだから、だから金は預けねえ。その代り毎晩晩酌飲ませて、そいでご飯食べる。うん。（後略）

DさんはA家で五年ほど働いた後、姿を消した。B氏は死期を悟つて、実家に帰り、亡くなつたのではないかと推測している。もしDさんが、A家で亡くなつていたら、当然、葬儀はA家で出しただらうという話である。

B氏の話すカイゴロシ像は特別悲惨な様子でもなく、また、

美談としても話されていない。家族の一人についての思い出を話している、という感触であった。

○更に同地域の別の家にいたカイゴロシの男女について話を聞くことができた。恋人同士となり、女性に子どもができたので、雇い先の家は、二人を結婚させ、分家を出そうとした。しかし、女性のほうの実家が収入を得られなくなることを恐れ、一人を強引に別れさせた。夫と子どもと引き離された女性はその後、亡くなつてしまふというカイゴロシ同士の悲恋の話である。

資料5（聞き書き資料e）

「もし貰い手がなかつた場合はずっとそのおうちで、働かせてもらつて。

○もうカイゴロシ、働かせて、だけど、世の中男と女だつたらあれば、E（男性）とF（女性）だべや、まあ男とおなごだから、上手いことできたもんだから、カイゴロシのつもりだつたんだが、子どもできたから、どうしようもないでしょ、一緒ににしてやろうと思つたども、おなごの方が、父親がバイキジョクツテ（聞き取れず）カイゴロシのつもりだつたんだが、二人を一緒にして新しいうちを建てて宅地まで買つたんだ。ねえ、買って与えて、そこさうちにしようと思ったところが、女人の実家の方が、金錢ほしいままに、こんだ、その、夫婦別れみたいなの、一緒になつた人をを別れさせてしまつたんだ。

「実家が？」

○実家が。そして、その子どもは今立派にいるども、で、別れて行つた女の方はもう死んでしまつた。男の人も最近になつてから死んだし。最初は二人どうしようか、カイゴロシのつもりだつたが、家屋敷建ててそこにおくばい、新しうちそこに建てたの、そこにいたかつたども、女の人の親父が来て、はがして行つてしまつた。

「それは、結婚させてしまうと実家にお金がもう入らなくなつてしまふからですか？」

○そうそう、金が入つてこねえ。一緒になつたんではそつから金がむしらんねえでしょう。

「雇つてもらつておうちの方から、実家にお金が入らないから、結婚させないつて言うふうに。

○うん。最初は二人を一緒にして多少の田んぼと山を預けて、生活させて、分家出すつもりでいたんだ。ところが、子ども、腹おつきくなつたて言え、監督不行き届きだの何だのかんだのいざこざ、いちやもんつけて、その、飼つておいた人のところから金むしるためにはがしてしまつたんだ。行きたくね、行きたくね、ついていたんだども、はがしていつたんだ。だから、その後妻にもいかねで、行つたんだつたかいかねかつたか、子どももいないし死んでしまつた。そういうのをカイゴロシ。カイゴロシで分家に出そうとした。

「男の人も同じ？奉公人同士で？」

○おう。奉公人同士だ。

「男の人もカイゴロシで。」

○おお、カイゴロシでいただつたんだ。（後略）

B氏は、Eさんが不幸な死を遂げた原因を貴重な収入源を断たれることを拒んだ実家によるものである。と話している。また、CさんとDさんに関しては、実家や本人自身の事情でカイゴロシという立場に置かれたとしている。

三、カイゴロシと富

調査のなかで、カイゴロシはしばしばその家の富と関連して話されることがあつた。

資料6（聞き書き資料a）

「そういう人の働きであの、さらに裕福になるというようなこのいざこざ、いちやもんつけて、その、飼つておいた人のところから金むしるためにはがしてしまつたんだ。行きたくね、行きたくね、ついていたんだども、はがしていつたんだ。だから、その後妻にもいかねで、行つたんだつたかいかねかつたか、子どももいないし死んでしまつた。そういうのをカイゴロシ。」

「周りの人がその家が裕福になつたのは、そういう人が。」

○ああ、居候がいて。

「いるから、あの人の働きであそこのうちは今のようになつた

なあ、というようなことは？

○おお、うんうん。今のようになつたなあつていうども。ああ

そういうのは、「あそこのうちが安泰であそこまで来られたの

もあの人のお蔭だなあ」というのはあるね。（略）

またねえ「あそこのうちのあれは米びつだ」とねえ、言われ

るのもありましたよ。それもカイゴロシです。それも、あれは
何のあれもなくお嫁さんもらつてやれるわけじゃない、分家に
出してやれるわけでもない、「あれはあそこのうちの米びつだ」
と「ああ気の毒だなあ、あれもカイゴロシだなあ」というよう
のものありますから、いちがいにこれがこうだああだつていう
ようなことはできない。

資料7（聞き書き資料d）

—あそこのかいゴロシにされている人は米びつだつていわれて
たことがあるって。

○そんだ。米びつてのは、結局金をくんなくたつていいわけ
でしょ。

：はい。

○賃金くれなくつたていいから、ただ味噌とかまんま、かせな
がら、ちょっと、正月になればイヤミ（聞き取れず）いつて來
いとかなんかつて、小遣いしかくれんたつていいから、金、何
もださんだつていいわけだから。つか、結局その人たちが働い
た分、みんな親方のところはいるんだから。

—そういう人たちの働きのおかげで一財産を

○おお、ふとる、ふとるんだ。

—そういうおうちがある。

—そそう、ふとるつていうんだ。そういうことをねふとるつて
言うね。（後略）

資料8（聞き書き資料b）

△うん。作男みたいにして。

○結局食わしてやればいい。

△うん。

○それで大事にしてもらえるんさねけつこう。

△働くからね。

○他へ行かれるより自分で働けつて、食べるだけ、賃金も
くれん、こずかいちょつとくれるくらいで。

△んだねえ。

○賃金もいらぬでしよう。（後略）

つまり、周囲からは、無給であるというカイゴロシの特質か
ら、その家が裕福になる理由として考えられていたようである。
しかし、カイゴロシを実際に雇つていた経験のあるB氏は無
給ということに関して次のように話している。

資料9（聞き書き資料e）

○ああ、ちゃんと、あのー金も預けてやつたもの。常に着物つたつて腰履きからパンツから何から買って与えてやんねばならないもの、作るわけにはいかないもの、そういうのを金銭にたてる、却つて金銭支払うよりかね却つて一杯になる。

まあ、お洋服もあつらえてだと。

○そうそう、一杯になるんだ。あのー勘定すつとね金一年に、あのー、百円か、それでもね手ぬぐいだ帯だ服だ山仕事の地下足袋だみんなね、そうすると、一年ね金くれて何にもかまわない方が得なんだ。金やらんけど、全部やつてやつと、やつと人が損するんだ。そうなるがね。（後略）

また、B氏の妻も「まず、ようくます、雇つて生活できたかと思うとたまげたよ」と話しており、雇い主側には、必ずしもカイゴロシが、自分たちの財力に関わりがあるという意識はない。また本人に賃金を支払つていなくても実家には米何升といふ取り決めがあつた。とも話している。

しかし周囲からは、給金を支払われることなく働いているカイゴロシはその家にとって従順で都合のいい労働力であると解釈され、それゆえに歓迎される存在として考えられ、その家の富を左右する存在として認識されていたのではないだろうか。

カイゴロシにされていた人々の事情は、それぞれ様々であるが、何らかの障害を持つていたとする話が何例か見られる。ここでは、障害者に関する伝承である福子伝承との関連性について述べたい。

福子伝承とは何らかの障害を持つた子どもを「フクゴ」「タカラゴ」といい、大切に育てるにその家に福をもたらすという、近畿・瀬戸内地方を中心に全国的に分布しているといわれる伝承である。

「福子伝承」の本格的な調査を行つたのは芝正夫大野智也であつた。二人は社会法人全日本精神薄弱者育成会（手をつなぐ親の会）を窓口として府県支部会事務局宛て及び、親個人宛て、さらに機関誌などを発行している歴史・民俗等の各研究会宛てと研究者個人にて「福子伝承」に関するアンケートを発送した。アンケート項目は名称・呼ばれる理由・呼ばれる側の身体的特徴・伝承経路等多岐にわたつていて、全国に発送された三四九通（親の会関係九十九通・研究会関係二五〇通）のアンケートのうち回答があつたのは一二四通（親の会関係四十七通・研究会関係七十七通）であつた。さらにそのうちの54通が「福子伝承」の事例を伝えてきている。

障害児がフクゴ・タカラゴ等と呼ばれる理由として寄せられた解答を芝は次の三種類に大別している。

四、福子伝承との関連性

B 家族の厄を背負つてくれているから（註3）

C よく働き、労働力として経済の足しになるから

Cタイプの回答はA・Bに比べて数は少ないが、秋田県大館市・新潟県三条市・栃木県下都賀郡壬生町・滋賀県守山市石田町・大阪府堺市・兵庫県津名郡一宮市に各一例ずつ、東北地方から近畿地方にまで分布している。新潟県三条市と栃木県下都賀郡壬生町の回答を引用する。

資料10

当地方で「タカラオジ」（オジとは「一・三男のこと」といった場合、その家のためによく働く二・三男と言う意味と少し知恵が足りなくて、おとなしく家の者のいうなりに働く二・三男で、分家をだしてやる心配のないもの）をいう場合とがある。「タカラ」には皮肉と侮蔑の意味がこめられている場合のある事も考えられる（新潟県三条市）（註4）

資料11

知恵おくれなどの障害のある人で、もくもくとよく働く人は、その生家の仕事をさせておき「オタカラ」などという。働き手として外に出す金も使わずにいるから（「後略」）（栃木県下都賀郡壬生町）（註5）

Cタイプの回答を見ると、「タカラゴ」「フクゴ」がその家の従順で都合のいい労働力として受け入れられていたことがわかる。これは、先に述べたカイゴロシに対する周囲の認識と同種のものではないだろうか。

カイゴロシにされていた人々に対して、話者たちは「かわいそう」「気の毒だ」という趣旨の発言をしばしばしている。カイゴロシ、という立場に置かれることは、一つの不幸であった。その不幸な立場に追いやった原因を、本人の資質や、実家の経済事情など、話者にはどうしようもないところに求めて、話そうとしている。また、人々が不幸について、話そうとする時、そのマイナスの部分を強調して話す場合と、マイナスの部分を何とかして、部分的にでもプラスに解釈して話そうとする、二つの姿勢があるようと思われる。積川町民俗学座談会での北上の発言は前者であり、後者の姿勢は資料2の様に、カイゴロシについて話す際、話題が雇い主との感動的な秘話になつてゆくという点に見られるのではないか。また、カイゴロシがその家にとつて有益な労働力であるとの解釈も、その姿勢の表れではないかと思われる。

身体に何らかの障害や、特徴を持った子どもがその保護者に富をもたらす、といった話は、様々な昔話、世間話で語られている。その背景にはこのカイゴロシにされていた人々のような、その家にとつて、いわば都合のいい労働力になる存在があり、

その人々に向けられた周囲のまなざしが、やがて、一つの伝承や物語へと昇華されていったのではないだろうか。

にいっていました。（京都府京都市内）四二頁

芝正夫・大野智也『福子の伝承』堺屋図書一九八三 四五頁

註1 津川町民俗学座談会の出席者

昭和二十四、一、三〇 関山健造郎に小林先生〔註 小林存〕

を迎えて

来会者 佐藤元君（東蒲地方事務所教学課長）、北上一男君

（同厚生課主事）、赤木源三郎君（津川町助役）、大堀キミ

女史（津川町婦人会会长）、津川女史、田邊重平君、渡邊

君、白田君（新潟民衆新聞記者）、関山健造君と同夫人

（敬称略）

『高志路』百三十号 昭和二十四年二月

註5 4に同じ

聞き書き資料※ 調査者

a 一〇〇一年 三月調査

男性六十代

b 一〇〇一年 三月調査

男性七十代（○）・女性八十代（△）

c 一〇〇一年 五月調査

男性（○）

女性（△）両者とも六十代

d 一〇〇一年 三月調査

男性七十代

e 一〇〇一年 八月調査

男性八十年代（○）女性八十年代（△）

女性七十年代（▲）

芝正夫・大野智也『福子の伝承』堺屋図書 一九八三

*引用した文献の一部に不適切な表現がいくつかあったが、研究の内容上そのまま引用した。差別的な意味で使用しているわけではないのでご了承いただきたい。

註3 京都ではなんらかの障害を持つた子が生まれると、一家の不幸を背負つてくれていると言う意味で大切に育てました。

頭の大きい人（知恵おくれの人を含む）、発育のおそい人をさし、昭和十年代、京都市中の町内、だれともなし

（たかつか・あきえ／國學院大學大学院）

表1 カイゴロシにされた人物の特徴

《一般例》	1	2	3	4	5
話者・資料記号	男性60代・聞き書き資料a	70代夫婦	70代男性 80代 女性・聞き書き資料b	男性70代 聞き書き資料d	
性別	男性が多い	男女とも	男女とも	男性が多い	
特徴	知的障害者	独立しがたいその家の甥・姪	勘当された若者	流れ者・知的障害者	生地に、いられなくなった人。
仕事	子守			農作業	農作業等家業
賃金	基本的には多少の種草銭等		食べるものだけ	基本的にはし。 小遣い程度	基本的にはし。 小遣い程度
期限	一生・死ぬまで		一生・死ぬまで	一生・死ぬまで	一生・死ぬまで
死後	墓地の隣に埋葬され、過去帳には世話を記載される				
呼び方					
雇う家の特徴	余裕がある家		余裕がある家	手間が足りない家	

《実例》	6	7	8	9	10
話者・資料記号	女性80代	男性60代 聞き書き資料a	男性・女性両者とも60代・聞き書き資料C	男性70代 聞き書き資料d	
性別	男性	男性	男女とも(女性が多い)	男性	男性
特徴	貧しい家庭の子ども	知的障害者	借金をした人	身寄りのない人	
仕事	子守	子守		農作業等	
賃金	基本的にはし。親に支払われていたかも		基本的にはし。小遣い程度		
期限	一生・死ぬまで	一生・死ぬまで	借金の分だけ	一生・死ぬまで	一生・死ぬまで
死後				雇い主が葬式を出した	葬式は雇い主が出し、骨は実家に帰された
呼び方		(名字)のじい		おんつあま	
雇う家の特徴	金持ち	いい家	お金持ちの家		

《実例》	11	12
話者・資料記号	男性80代	聞き書き資料e
性別	女性	男性
特徴	貧しい家の子ども	無錢飲食常習者
仕事	家事・子守・農作業	農作業
賃金	基本的にはし。小遣い程度。実家に米と炭	基本的にはし
期限	二十代で雇われていた家から嫁に行った	一生の予定であったが、晩年行方不明に
死後		
呼び方	名前	
雇う家の特徴	お金持ち	お金持ち